

斜里町クシュンコタン遺跡

豊原熙司・坂井通子

053-0851 苫小牧市山手町 1-2-1, 文化財サポート有限公司社

Kushnkotan Site, Shari, Hokkaido

TOYOHARA Teruji & SAKAI Kayoko

Bunkazai Support Ltd., 1-2-1 Yamate-cho, Tomakomai, Hokkaido 053-0851, Japan. bunkazai104@kxa.biglobe.ne.jp

はじめに

平成 18 (2006) 年 5 月に、クシュンコタン遺跡を調査する機会を得た(斜里町教育委員会 2006)。昭和 46 (1971) 年頃に筆者の一人である豊原が、河村淳史氏にエゾシカの下顎骨に刺さった銚頭を見せていただいたことがある(この銚頭については河村(1966)を参照)。出土地が、かつて斜里市街地に所在していた 3 箇所のアイヌコタンの一つであることを知り、それ以来、この遺跡について興味を持っていた経緯がある。ここでは遺跡の概要と、かつて所在していたクシュンコタンについての新たな知見について述べてみたい。

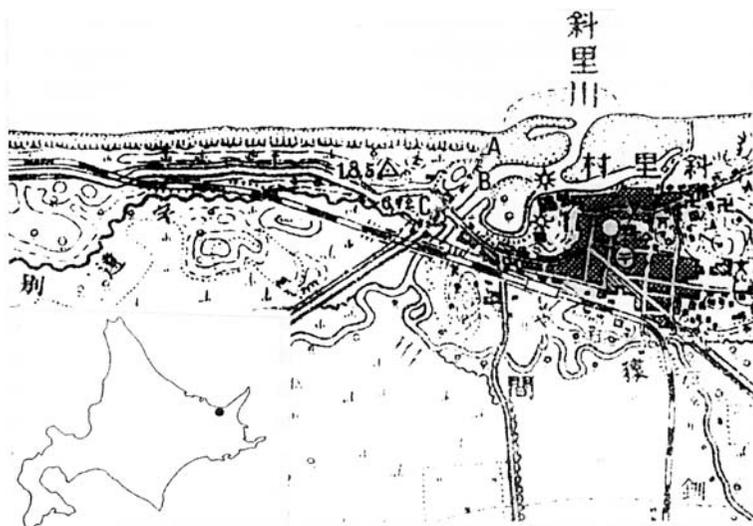
小論をまとめるにあたって、河村淳史、中川元、

松田功、因幡勝雄、伊藤せいち、本田克代、河野本道、宇田川洋、井上巖、涌坂周一、佐藤和利、角達之助、宮夫靖夫、高橋健、笹田朋孝、畠山一美の諸氏に多くのご教示を得、お世話になった。また、涌坂氏にはエゾシカ猟について議論していただき、『更科ノート』の閲覧・使用については、所蔵する弟子屈町教育委員会の小林俊夫教育長に便宜をいただいた。針の分析は、第四紀地質研究所の井上巖氏によるものである。厚くお礼を述べる次第である。

遺跡と出土遺物

遺跡は斜里川河口の左岸に所在している(図 1)。私たちが発掘調査をおこなったのは、銚頭

図 1. クシュンコタン遺跡の位置(昭和 8 年, 大日本帝国陸地測量部図)。



が出土したかつてのコタンの約 500 m ほど上流部に位置している (図 1-C)。調査は、道々・斜里停車場美咲線 (道道 769 号線) の歩道拡幅工事に伴う事前調査であった。

現在のクシュンコタン遺跡は、かつて江戸期末から所在していたクシタコタン (クシンコタン) も含めた広範囲な遺跡となっている。発掘区からは、トビニタイ土器群、擦文土器、石器、軽石製浮き子、陶器、砥石、溶解したガラス、鉄製品 (釣針、平カスガイ、板状鉄製品、舟釘、洋釘、包丁)、古銭 (寛永通宝) が出土している。またコタンが所在した付近からは、河村淳史氏、金盛典夫氏、豊原によってガラス玉、針、骨角器、マサカリ、刀子、古銭 (永楽通宝: 明銭, 1408 年; 元符通宝: 北榮銭, 1098-1100 年; 寛永通宝)、砥石、石製玉、陶磁器の他に、哺乳類、鳥類、魚類の骨や貝

類が採集されている。コタン附近の遺物採集地は図 1-A, B であるが、B の北西側でアイヌ墓が 1 基、発掘調査区附近の C で墓が 3 基確認されている。

出土遺物のうち、問題となるのはエゾシカの下顎に刺さった状態の銚頭である (図 2-A)。残存するのは、長さ 14 cm、最大幅 4.2 cm と大形である。先端には鉄鏃が装着されている。厚さは 0.4 cm を測るが、錆びて腐植していることから使用されていた当時は側縁も含めて、もっと厚みなり幅があったと推測される。索孔は横二列の閉窩式で、血抜き孔も作出されている。長楕円形の文様が彫り込まれ、周りに 11 個、止め鉾の上部に 3 個の円形文様が、さらに長楕円形の中には×印が刻まれている。

エゾシカは、推定年齢が 2-3 歳の雌の個体である。銚頭は左側の下顎骨に、斜め後ろの方向か

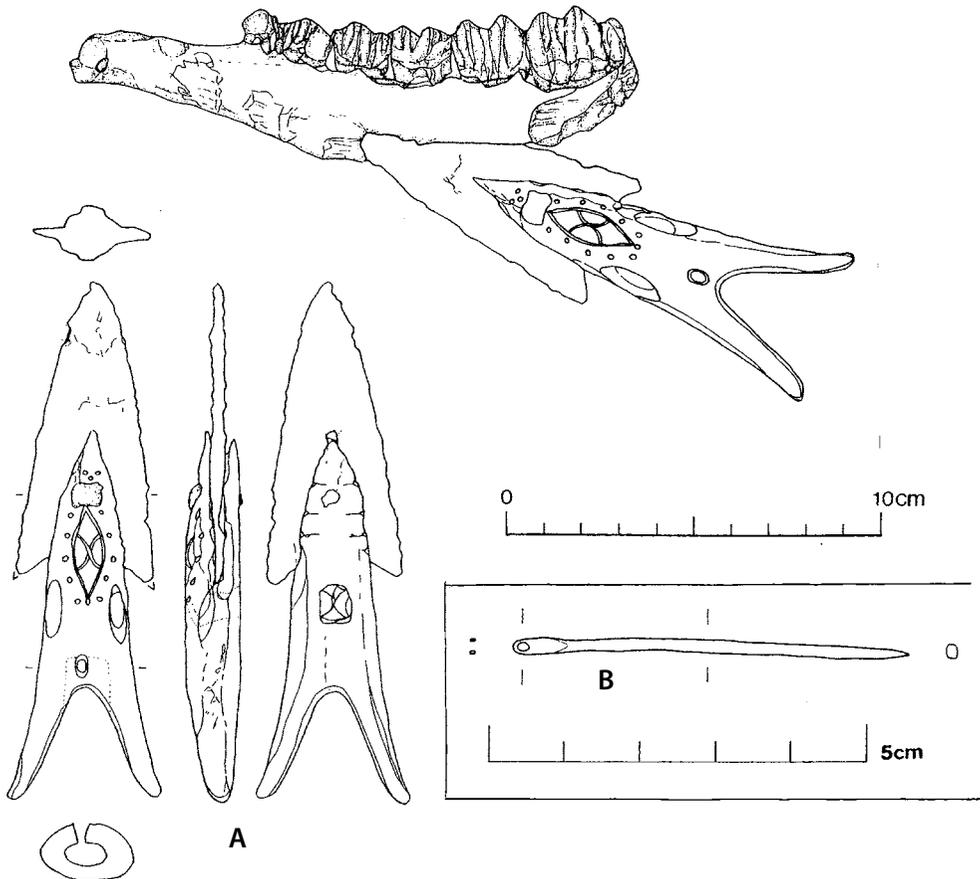


図 2. クシュンコタン遺跡出土遺物. A: エゾシカの下顎に刺さった状態の銚頭. B: 銅製の針.

ら刺突されている。疑問となるのは、銚頭が外されることなく刺さったままの状態に残されていたことと、銚頭を使用してのエゾシカ猟がおこなわれていたのかということである。銚頭は何度も利用できる道具で、破損した銚頭を修理して再利用している例もいくつかみられる。

これらの疑問を解決するために、推測を試みたことがある(豊原 2001)。エゾシカの下顎に突き刺さりうる状況は、狩猟者がエゾシカの左後方の位置から狙ったことになる。刺さっている状態から考えると、エゾシカよりも低い姿勢をとらざるをえない。2-3歳の雌のエゾシカの肩高は、個体にもよるのであろうが一般的には1m前後とされる(中川元私信)。さらに首から頭までの部分があるので、60cm位は高い位置となる。銚によるアザラシ猟に用いる柄の長さは9尺(約2.7m)位で、「投げた方がさきり易いので手で持って突かず手の中ですべらしてつく」(『更科ノート』昭和26年、坂井惣太郎氏談)とされる。狙い手は、柄を肩より上の頭の附近まで上げて投げる姿勢となる。同じような使用方法を考えると、このような状況での狙撃は、すくなくとも斜面からしかありえないことになる。雄シカは、木の枝やブドウツルなどの茂みのある林では角が絡むのを防ぐために、角を背中に付けるような姿勢をとるといわれる。しかし当該個体は雌なので、偶発的に頭を持ち上げたとしても、狙い手の高さから考えると妥当性がない。

また、長さ2.7mほどの狩猟具を山の中で持ち歩く理由も考えがたいので、もしこのような狙撃の状況が想定できるならば場所は海岸線の斜面が可能である。いずれにしても、元々はエゾシカ猟



図3. 流水上のエゾシカ。

を意図としたものではなかったのが偶発的な状況で狙撃したと考えられる。

出土した場所が斜里川河口の段丘面であることから、流水との関係で推測できないかと考えてみた。流水に乗ったエゾシカであれば、このような狙撃の状況はありうるからである。山のような状態の流水に、エゾシカに乗った状態で河口に打ち寄せられることはままあることである。羅臼町峯浜で実見しているし(図3)、事実、昭和10年代までは氷の山が斜里川河口を埋め尽くし、アザラシが乗っていた(畠山一美私信)。しかし、足が滑ることから氷の上を移動することはむずかしいとも考えたが、無理な推論であろうか。

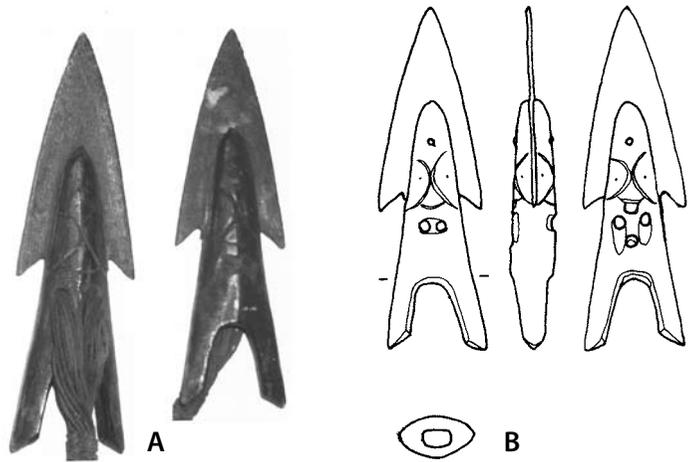
資料の保存等から季節を明らかにするための分析はできないが、エゾシカ猟は毛皮や肉の確保のために秋から春先におこなわれるのが一般的である。このことも、冬期間に狙撃されたことを裏付けている。

またアザラシ猟の狩猟具について坂井氏は、シウリ(シウリザクラ)製の9尺くらいの柄にサビタ(ノリウツギ)製の中柄を固定し、その先を銚頭の茎槽に装着している。さらに索孔に紐を通し、イラクサ製の長さ30間(約54m)位の縄で結ぶという(『更科ノート』)。

このことから、エゾシカの下顎に銚頭が刺突された場合には、索孔は破損していないことから銚頭と固定されている獲物を手繰り寄せる長い縄はそのまま残されることになるはずである。どのような状況のもとでエゾシカを狙撃し、その結果、どのような理由でクシュンコタン遺跡に残されたのか謎は尽きない。

突き刺さっている銚頭の刻印が、発見者の知らない使用者のものであれば肉あるいは毛皮を入手し、他は貝塚に放棄したと考えられないであろうか。銚頭に刻まれている印が所有者を表しているのであれば、「発見したものは誰が捕らえても差支えない習慣となっていたが、丸太に刻んだシロシ(記号)によりわなを仕掛けた人にその肉の一部を送ることにしていた」とされる(犬飼1970)。クマ猟における領域であるが、他の領域である釧路領の者も斜里領に入って自由に狩猟ができたようである。明治以降のことと思われるが、「白糠から彼岸頃、越川、シレトコ、標津方面まで熊とりに来た人達は(略)、他国から入った場合、

図4. 明治初期に斜里で使用されていた銚頭(小山田勉蔵). Bは金盛(1970)の図をトレースしたもの.



挨拶に来た。前太郎チャチャはこっちに来てとった場合には必ず熊の肉をもつて来た」と坂井氏は話している(『更科ノート』)。前太郎チャチャとは、西別川上流部の虹別(釧路管内標茶町)に居住していた土井舞太郎氏(明治3-昭和12年)の事と思われる。また虹別に居住していた前田千太郎氏(明治9年生)は、狩の範囲はなかったと話している(河野本道私信)。

刻まれた印の所有者が明らかであれば、獲物の一部と銚頭とを送り届けることになる。しかし、銚頭が貝塚に放棄されていることから、所有者が判明しなかったと考えざるをえない。また、問題となる個体が腐食した状態で海岸線に流れ着き、それを貝塚に放棄したとも考えられるが、腐った個体をわざわざ運んで来る理由は考え難い。これらのことから、海岸あるいは河口に流氷によって流れ着いたエゾシカを至近距離に在る集落までは運び解体し、不用な部分を放棄したと解釈するのが妥当であろう。

斜里では山猟はあまり重視されていなかったとされる。明治期のことであろうが、「アザラシ猟に恵まれていたので鹿猟はさほど重要ではなかったようで、狼の喰い残したものを拾い集めただけで充分であったと云える」(更科1955)。「鹿 狼の喰ひのこしをひろつたり、雪の深い年わ小沢に入ったのをわなでとり雪のすくないときは犬に追はしてとった」。さらに、「鹿は止別、小清水方面に多かった。牧場のようだった」とも述べているので、エゾシカ猟には依存していなかったと思わ

れる(『更科ノート』昭和25年10月18日, 坂井氏談)。

『東蝦夷場所境調書式』に、「シヤリ場所蝦夷共先年より子モロ領シヘツ、ニシベツ川上へ冬籠飯料稼として毎年九月頃より罷越候仕来ニ付」(秋葉1996)、根室場所の通辞であった加賀伝蔵の『加賀家文書』(「北方要話」)に、「境内部にて山居の夷なし。只秋季萱川源に土人入て食料の鮭を漁するの間居のみ」, 「凡四十年前ほど前カンチウシはシヤリ領冬計出張住居、喰漁鷺猟致」(秋葉1989)とある。「凡四十年程前」とは、文化4(1817)年より前頃となる。これらの記載から、サケ、ワシなどの猟漁をおこなっていたことが理解できる。また津軽藩士として斜里の守備についた斉藤勝利による『松前詰合日記』(北海道大学北方資料室蔵)に、「当所より東灘、シヤリより山合南、クスリと申場所まで七里の里数之有由、右のクスリ迄の山合川筋通江引越翌四月迄同所江帰り不申候」と記述されている(更科1955)し、さらに『松前詰合日記』の原本を閲覧することができなかったが、田中最勝氏の現代語訳には、「一、蝦夷言葉に、古くから住居、越年するところをウルハコタンと云う。ウルハは古いところを云う。コタンとは住居の里を云うのである、と子供蝦夷は云っている。ウルハコタンへ行くので、しばらくお目にかかれませんかと云って、十月初めごろまでに当地を引払うのだそうである」と書かれている(田中・高倉1973)。このことから文化4(1807)年頃までは、冬期間は標津や西別川上流などに移

表 1. クシュンコタン遺跡 A 地区で採集された針の蛍光 X 線分析結果.

元素	Wt (%)	At/mole (%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
Al	2.2965	4.3229	0.0004488	795	0.1899
Si	8.1043	14.6556	0.0031074	5771	0.0983
P	6.4685	10.6068	0.0076493	7181	0.0746
S	1.5434	2.4447	0.0006268	2731	0.0462
Cl	1.6077	2.3032	0.0011616	2380	0.0573
K	0.9698	1.2597	0.0007024	1125	0.0715
Ca	3.1800	4.0297	0.0024593	5630	0.0517
Fe	0.5381	0.4894	0.0005723	3617	0.0181
Cu	74.4488	59.5042	0.0519152	366405	0.0287
As	0.4090	0.2772	0.0001582	1061	0.1037
Pb	0.4339	0.1064	0.0003103	750	0.2561

測定条件: 電圧 (30.0 kV), 電流 (1.600 mA), ライブタイム (200.00 sec), パス (Vac). 定量条件: 定量法 (標準). 分析元素: Al, Si, P, S, Cl, K, Ca, Fe, Cu, As, Pb.

動し居住していたことを窺い知ることができる.

『更科ノート』によれば, 斜里での山猟には, 長さ 5 尺 2 寸 (1.5 m) くらいの弓が用いられたとされる (坂井氏談). このことから, アザラシ等の海獣を対象とすべき銛をエゾシカ猟に使用する理由は見あたらないことになる. この地域ではエゾシカ猟が一般的でないことも考えあわせると, 出土した資料は偶発的な要素によるものとしておきたい. その一方, 銛頭に刻まれた×の印がヒグマ (キムンカムイ) を表している可能性も否定できない.

図 4-A は, 明治初期に斜里で使用されていたといわれる銛頭である. 斜里町峰浜の広田幸太郎氏の家に伝わっていた資料で, 小山田市太郎氏が譲り受けたものである (小山田勉蔵). 小山田市太郎氏は藤野の漁場で帳場をしていたといわれ, その後に子息が峰浜で雑貨屋を営んでいる (佐藤和利私信). この銛頭は長さ 11.8 cm, 最大幅 3 cm で, 背・腹の両面に×を基本としたと考えられる印が刻まれている (図 4-B は金盛 (1970) からのトレース図である). この資料についての詳細は, 金盛典夫氏によって紹介されている (金盛 1970). それによると, 広田家に伝わっている機織具の一部にも同様の印があることから, 同家の家紋と推測されている. また, この銛頭はアザラシ猟のみに使用されていたとされる. クシュンコタン出土の銛頭も, 海獣を対象とした狩猟具と考えられるので, 偶発的な状況でエゾシカを狙ったということができそうである. いずれにしても,

エゾシカ猟における銛頭を用いた類例を待つて再考したい.

針が, A 地区で 1 点採集されているが, 素材は銅製である (図 2-B). 長さ 5.4 cm, 幅 2 mm で, 針穴は 1.5 mm × 1.8 mm の長楕円形を呈している. 斜里町教育委員会 (2006) には掲載できなかったが, 蛍光 X 線分析をおこなっている (表 1). 分析はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (日本電子製 JSX-3200) を使用している. 分析値は約 75% が銅 (Cu) であった.

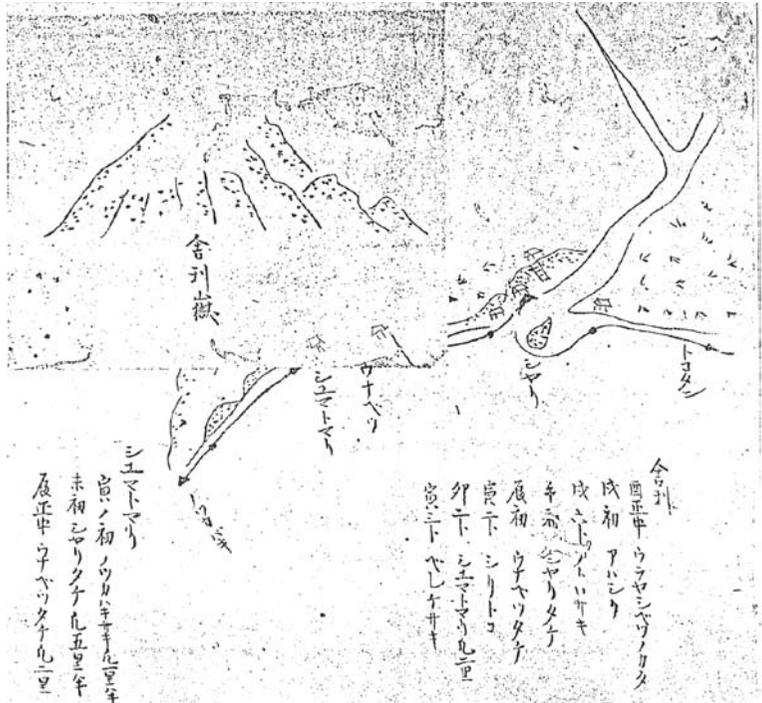
銅製の針は管見のかぎりでは, 苫小牧市弁天貝塚採集の資料があるのみであった (佐藤 1987). 写真のみで図は掲載されていないが, 長さ 13.64 cm, 厚さ 2.4 mm で, 針穴は 1.5 × 1.7 mm の真鍮製と記載されている. 交易による移入品と考えられるが, この遺跡からは銅線が多く出土していることから, これを素材とした自製品の可能性も否定できない.

クシュンコタンの地誌

遺跡の所在したクシュンコタンは, 江戸時代末にはクシタと記載されている. 坂井氏はクシュンコタンと呼んでいたが (河村 1972), その後はクシュンコタン遺跡と呼称されている.

河村 (1972) は次のように述べている. 「斜里町港町斜里川左岸の川口近くに高さ約 20 m の砂丘があり, この砂丘に包含層の薄い小貝塚があった. この地点は旧斜里川がカーブをなし旧川口まで, オホーツク海に沿って平行にながれていたの

図5. 「西蝦夷地分間附図」(寛政4・5年).
松田(1992)より.



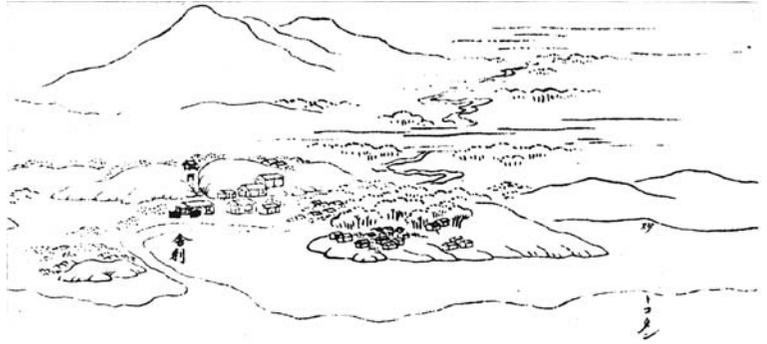
である。江戸時代末期より明治の初めにかけて、この斜里川沿いに三つのコタンがあった。故坂井惣太郎氏はこのコタンについて、昭和24年8月14日に次のように述べていた。『わしが、子供の頃斜里には三つのコタンがあった。クシンコタン(川向の意)4-5軒、リクンコタン(川上の意)現在若松氏宅裏より鉄道官舎付近、バナコタン(川下の意)8軒以上、現在の和田宅付近』このよう

に同一地域の三つのコタンがあったことは斜里アイヌの人口も多く勢力があったことを示すものと思われる。また、故納谷爺太郎氏も『川向には明治17年頃までコタンがあり、その頃火事に合いなくなった』とも述べていた。このことから推してもクシンコタン貝塚を示すものと思われる。この貝塚付近にはアイヌ墓地があり、現在でも伸展アイヌの人骨が内耳なべ、刀子、玉類などの副

表2. シャリおよび斜里川河口付近が描かれている絵図、または地名の記された図をもつ古文獻.

寛政4・5年頃? (1792-1793?)	「西蝦夷地分間附図」	筆者不明(図5)
寛政10年(1798)	「自高島至斜里海岸二十三図」	谷口青山(図6)
寛政11年(1799)	「アバシリ・クスリ間里程図」	近藤重蔵
寛政11年(1799)	「クスリ・シャリ・シベツ間里程絵図」	近藤重蔵
天保3-5年(1832-1834)	「東西蝦夷地大河之図」	今井八九郎(図7)
安政3年(1856)	『手控辰五』	松浦武四郎
安政3年(1856)	「シャリ運上屋元眺望」(『竹四郎廻浦日記』)	松浦武四郎(図8)
安政4年(1857)	「ネモロ越シャリ川有司舎会所・絵図」(『東徼私筆』)	成石修
安政4年(1857)	「石狩・テシホ・クスリ外十二所 川々取調」	松浦武四郎
安政4年(1857)	『入北記』	島義勇
安政5年(1858)	『西蝦夷日誌』	松浦武四郎(図9)
安政6年(1859)	「東西蝦夷山川地理取調図十三」	松浦竹四郎(図10)
安政6年(1859)	「会津領斜里・絵図」	目賀田帯刀

図6. 「自高島至斜里沿岸二十三図」(寛政10年). 松田(1992)より.



葬品とともに発見されている。しかし、昭和18年頃陸軍の陣地作りが始まりその大部分が、その後風の浸食によってくずれ落ち、昔の姿ではなかったが最近砂が建築ブームにのり高価となり、ついにアイヌ土俗期を知る上で貴重な遺跡もその姿をとどめなくなった。」(河村1972)。

このことについて河村氏に確認したところ、昭和24(1949)年8月14日ではなく24日で、河村氏の他に高倉新一郎、河野広道、高桑華夷治も同行している。また、納谷爺太郎氏の話の中に出てくる川向のコタンの火事のことは、「その頃火事に合いいなくなった」と書いているが、「火事に合って居なくなったらしい」と述べていたと言うことである(河村淳史私信)。河村氏が昭和18(1943)年頃に焼けた柱が残っているのを何本も確認しているのだから、火事によってここから移転したのは事実であろう。

坂井氏は明治14(1881)年生まれなので、この話をされた時は68歳である。この話を裏付ける事が、『更科ノート』(昭和25年10月18日)に次のように記されている。「ヌサと家の間隔は随意 山の大きいのはポロヌサ(バナコタンにあった)。家のはポンヌサ 競馬場付近 停車場-局付近がペナコタン(駐車場の裏の停車場付近にヌサ) 裁判所-和田のゴミ捨場 バナコタン、クシンコタンにもヌサがあった」。

いずれにしても斜里には、クシンコタン(川向かいの集落)、リクンコタン(高い所にある。上の集落)、バナコタン(川下の集落)の三つの集落が所在していたことになる。河村氏の言うリクンコタンは位置からして、ペナコタンを指すのであろう。そして、クシンコタンは明治17(1884)年頃に火災によって消滅したことになる。

クシタコタンは、江戸末には網走から斜里へ通じる交通路付近に所在していた集落である。寛政年間の「西蝦夷地分間附図」は、斜里川河口付近のもっとも古い絵図と思われるが、ここにはクシタなる地名は出てこない(図5)。シヤリの対岸方向にトコタンが記されている。しかし、トコタン、シヤリの位置に黒点があることと、これらの地名の間となる斜里川左岸河口に同じように黒点があり、ここには家が1軒描かれている。このことから、この位置がクシタの集落となろう。

シヤリおよび斜里川河口付近が描かれている絵図や、地名の記されている図の一覧は表2のとおりである。

谷口青山の「自高島至斜里海岸二十三図」には、舍利(シヤリ)の対岸となる左岸の砂丘上に多数の集落が描かれている(図6)。近藤重蔵の「アバシリ・クスリ間里程図」にはシヤリが、「クスリ・シヤリ・シベツ間里程絵図」にはシヤリ、番屋、会所と斜里川河口が記されている。しかし近藤は実際には現地踏査をしていないので、聞き取りによる記録と考えられる。

今井八九郎の「東西蝦夷地大河之図」に、シヤリ川(19丁オ)が載っている(図7)。「天保三壬辰年ヨリ至同五申午年」と年記が付されている。シヤリ川の測量年度は天保5年とされる(谷澤・佐々木1979)。シヤリ川水源までと、幾品川上流部までが描かれている。川口にシヤリ川、横にドロ川と書かれている。また次のような添え書きがされている。「三十年前迄鱒鮭大漁なれとも此節元の三ツ一もなおよし」が、川筋だけで集落についての記載は見られない。

初めて絵図にクシタなる地名がでてくるのは、松浦武四郎の『手控辰五』(秋葉2001、以

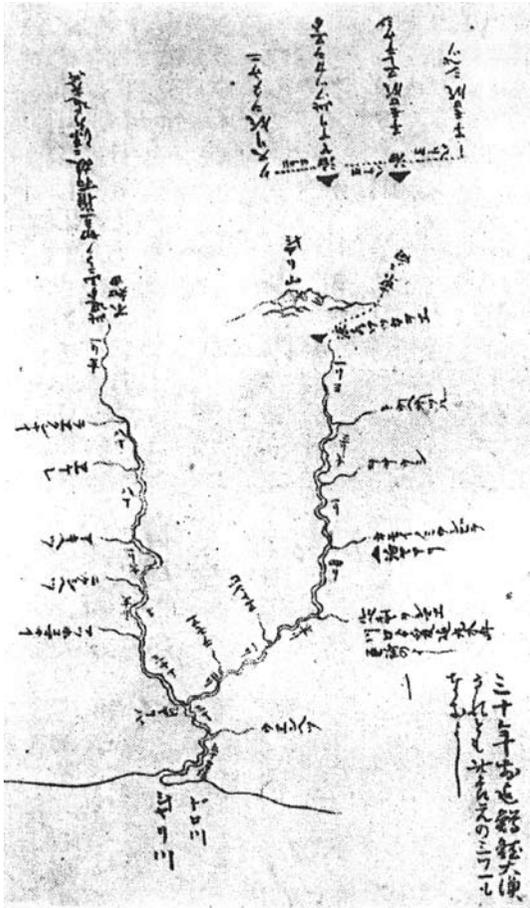
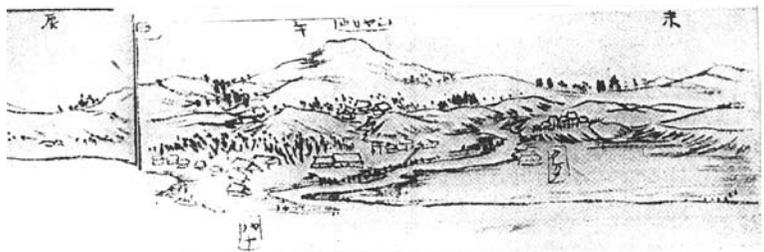


図7.「東西蝦夷地大河之図」(天保5年). 谷澤・佐々木(1979)より.

下『手控』), 『竹四郎廻浦日記巻の二十四』(高倉1978, 以下『廻浦日記』)であろう。『簡約松浦武四郎自伝』(小林1988)によると, 武四郎は安政3年と安政5年に斜里を訪れている。『手控』, 『廻浦日記』の挿絵に, クシタなる地名と集落が描かれている(図8)。『手控』にはクシタの西側に夷小ヤと記され, 集落が描かれている。また対岸にはバナの集落が延びている。『廻浦日記』の文中

図8.「シャリ運上屋元眺望」(安政3年, 『竹四郎廻浦日記』). 高倉(1978)より.



には, この付近のことが「クシタ 此処はシャリの川の西也. 砂地平山にして北向下に漁小屋二ヶ所有. 上に夷小屋立並ぶ。」と書かれている。20軒の家があり82人が住んでいて, クシタからアオシマナイまでを脇乙名のエタンヒロが仕切っていたとも述べている。このことから, かつてのクシタコタンは網走側となるアオシマナイ付近まで勢力が及んでいたことをうかがい知ることができる。

武四郎の『西蝦夷日記巻之八』(秋葉1988, 以下『西蝦夷日記』)には, 斜里川河口付近が『廻浦日記』よりも詳細に描かれている(図9)。河口左岸にクシタと記載があり, 海岸に家が描かれている。右岸には船玉, 稲荷, 観音と記され, 家が海岸線に沿ってバナまで続いている。文中には, 「川の西岸人家昔五十余軒, 今廿軒是をクシタと云. 名義イクシタの語り語, 則向ふ也。」と具体的に書かれている。

また武四郎の「東西蝦夷山川地理取調図十三」にも, 河口左岸にクシタ, 対岸にシャリ, ハナと記載がある(図10)。「石狩・テシホ・クスリ外十二所 川々取調」にも, 河口の左岸にクシタ, 夷家, 右岸にバナ, 会所, シャリバと記されている。いずれも, 「自高島至斜里海岸二十三図」(図6)に描かれている集落と同じ位置である。島義勇の『入北記』(北海道大学北方資料室蔵)には, 河口にシャリと記されているだけである。『東徼私筆』には, シャリ川左岸に家が3軒描かれ, 西側に子モロ越山道と記されている(大野1978)。対岸となる右岸には有司舎, 会所が記され, その間に鳥居が描かれている。また会所の西側には柵が廻され, 会所の前の湾には大小2艘の船が描かれている。『会津領シャリ・絵図』には, 斜里川左岸に集落は描かれていない。しかし左岸に渡船と記されているので, この位置がクシタであろう。右岸をみると弁天堂, 会所, 夷家が記されて

いる。夷家と記された付近の家の側にはナサ柵と思われる柵や、家から少し隔てた位置に高床の蔵と思われる建物も描かれている。

網走から斜里までの交通路を、『廻浦日記』でみる。アバシリベツ-番屋元 アハシリと云-ノツカ-フンヘヲマナイ小川-ヲヒシヨ小川-ヲシヨフ-エチヤヌイ-ニクリハケ小川-モコトウ-ナヨロ小川有-チシ子エ-トウフツ-マクンヘツ アヲシマナイ-フレトイ-ウハシコダン-ヤワンベツ-シユマ(オ)イ リニクル トコタル フツナイ ニナルエサン-クシタ-シヤリ-運上屋元となっている。

クシタの西側はニナルエサンで、根室方面に通じる通称斜里山道への入り口である。「ニナルエサン 此処子モロ越の道(是より子モロへ山道入

口) 有る也。砂路道よろし。クシタ 此処はシヤリの川の西也。砂地平山にして北向下に漁小屋二ヶ所有。上に夷小屋立並ぶ。番人共の言に当時二十軒(脇乙名エタンヒロ家内五人、小使コタンシヒ家内四人、土産取カアマ家内五人、ヨツチャリ家内六人、コトク家内七人、アシヌカル家内二人、コエヤンケ家内三人、トベフナイ家内六人、アエイ家内四人、ウコサン家内二人、チアニ家内四人、エフクンキ家内四人、ヤエシヤマンチ家内四人、アカクツ家内二人、ノシケヲマン家内三人)人別八十式人。此処を西側と申、当所より西アヲシマナイ迄の処此脇乙名にて可る也。此所も違者な者丈をクナシリへ遣られ居る由なれども、家数多くして土人より聞得ざりしも残念なりけり。

図9 『西蝦夷日誌巻の八』中の図(安政5年)。秋葉(1988)より。

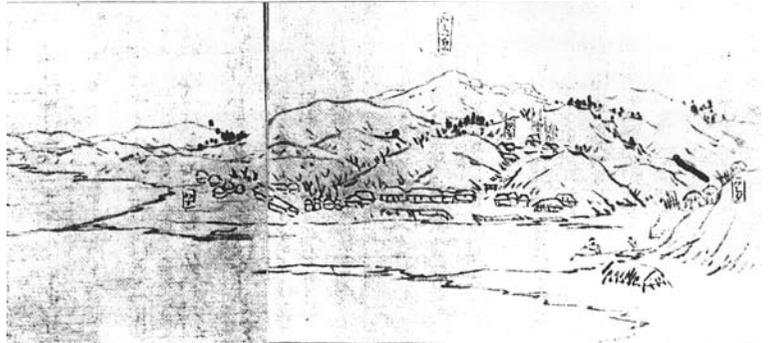
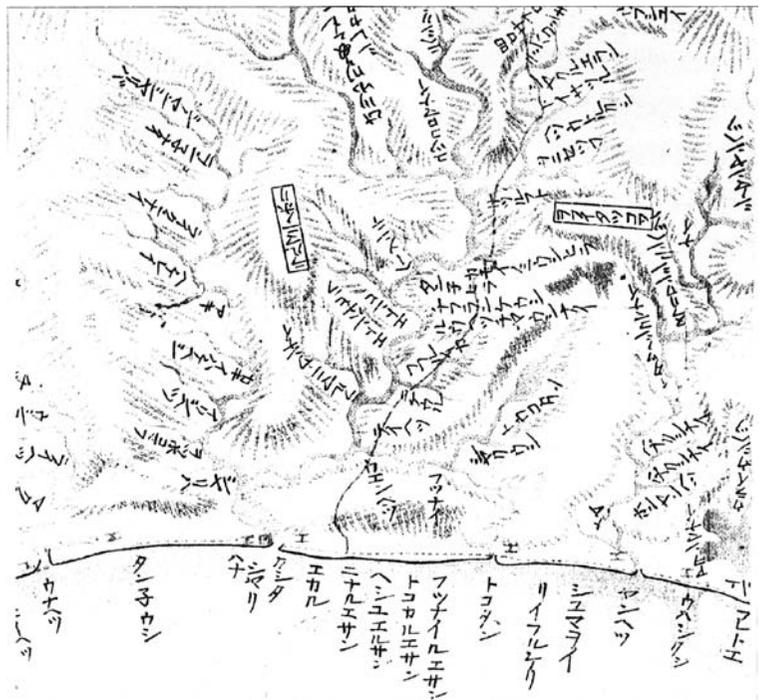


図10 「東西蝦夷山川地理取調図十三」(安政6年)。佐々木(1988)より。



(略)シヤリ 川中五十間斗, 本名シベシと云也。船渡し。(略)魚類鮭・鱒・鯨・チライ・桃花魚・雑喉, 其多き事は一箇の運上屋を置いて勘定に逢ふにてしかるべし。扱一昨日の通り浜道十八町戻りて山手の方に ニナルエサン 此所より子モロ越入口坂道へ上る。ニナルエサンは薪取に通ふ路と言訳也。」と記載されている。ニナルエサンから砂道を通り, クシタに出る。平坦な砂丘の上には小屋が建ち並んでいる。北側の下に漁小屋が2箇所ある。対岸のシヤリには舟で渡っている。

『東徼私筆』には、「廿九日(略)トコタン休所, 此奥に周回凡二十丁程の沼有り。サツフナイ一里塚。ニナルエサン, 此の処より東浦ネモロ越山道入口なり。是より砂浜に出で, エカル一里塚有り。それより川を渡りシヤリ会所なり。(略)故に山道を東部へ越る。是をシヤリ越という。」と記載され, 挿図の「子モロ越山道シヤリ川有司舎会所」には, 子モロ越山道, シヤリ川有司舎, 会所が記され家も描かれているがクシタは出てこない。ニナルエサンとシヤリ川の間に, 「エカル一里塚有り」と書かれている。エカルは『手控』にてでくる, 「ニナル 薪取, エサン路のこと」を指していると考えられる。

交通路の拠点ということを見ると, 斜里の会所と根室方面を結ぶ通称・斜里山道の入り口となるニナルエサンが重要な位置を占めていたのであろう。

斜里山道は, 古くから峠(清里峠)越の道として知られていた。享和元(1801)年に, 白糠に駐屯していた八王子千人同心が標茶へ通じる道として整備したのが始まりとされる。その後, 文化7(1810)年には標津に抜ける道も開削されている。

ニナルエサンのことは, 交通の要路であったことからいくつかの文献に記載されている。『西蝦夷日誌』には, 「ニナルエサン新道入口名義薪取に入道といへるなり。十八丁廿間砂道を過て縦モンヘツ境十四里十丁三十間五尺, 従アハシリ番屋海岸九里五丁四十五間, 従箱館海岸 川の西岸人家昔五十余軒, 今廿軒是をクシタと云。名義イクシタの詰り語, 則向ふ也。川中三十余間南岸砂崖五丁余 二股 右本川左シヤリハ此処より本川の事は, 新道の部に記す。左をシヤリバ川中三十余間名義蘆萩原の儀。(略)魚類・鮭・チライ・鱒・鯨・桃花魚多し。クシユリヘツ申口。舎利運上屋

通行屋, 備米蔵, 板蔵十棟, 大工小屋, 木挽小屋, 雇蔵, 雑蔵三棟勤番所 上に船玉社, 稲荷蔵, 観音堂, 此岬をハナと云, 名義下と云が如し。夷人多く昔し百餘軒, 今減じたり三十軒百三十人。此場所アハシリと昔し合し有しが, 近頃アヲシユマナイにて境する様に成たり。文政五壬午三百十六軒, 人別千三百二十六人, 安政丙辰百七十三軒, 六百九十七人 今当所の分(番屋元に三十軒, 斜里郡に八十軒)は三百三十六人。(略)舍利を立て十八丁廿間 浜まニナルエサン山道入口まで来り, 是より坂を上る。惣て一面の原なり。五六丁過 樹木立原に入しぼしウエンヘツ川中四五間, 橋有悪川と云儀。遅流にして深し。此上にヲフナイ小川, シヤリウシ小川トウコタン小沼等云処有。」と記されている。

また『東部安加武留宇智之誌参』には, 「ニナルウサン 等いへる処え到るや, シヤリの詰合い宮崎某より, 昼食を土人にもたせ贈り呉らるるが, 実に其厚情添なくぞ覚え, 依て此砂浜に火を焼き車座になりて, 醤油にて煮たる菜物を九日振にて喰したり。シヤリベツ こへて舎利運上屋に着。凡九ツ過と思はる, 先一同え清酒一升, 濁酒五升を遣し, 大儀之段申渡す。」と記されている(秋葉 1985a)。

ここではニナルエサンは, 新道入口となっている。それ以前は斜里から斜里川を船で七里ほど遡り, トンタベツクシ(現在の上斜里のエタンベツ川の合流地点附近)に上陸していることが磯谷則吉の『蝦夷道中記』(市立函館図書館蔵)に書かれている。

安政5(1859)年, 細野五左衛門の『西蝦夷地地名附』に, 「一 シヤリ 此処運上家有。通行泊家あり。板蔵七軒, 茅蔵七軒。漁は, 夏鱒漁場也。弁天社, 稲荷社, 万霊堂三ヶ所有蝦夷家沢山有。運上家前に川有, 巾十五間程船渡。フレトエより四里七丁四十五間。」「一, トコタン 一里三十町四十間 此処小休所板家腰懸。海岸より凡五十間位引上り有之。シヤリ運上家より手前十八町にてフツタイと云処より子モロ江越る入口あり。」と記載されている(秋葉 1992)。ニナルエサンではなく, フツタイが斜里山道への入口となっている。フツタイは「シヤリ運上家より手前十八町」とある位置関係から, 『廻浦日記』のフツナイ, 『東徼私筆』のサツフナイに該当する。いずれもトコ

タンの斜里寄りの位置となる。

このことから、かつては網走方面から根室・釧路方向に至るフツタイからの道が在ったことも考えられる。『西蝦夷日誌』に「ニナルエサン新道入口」とあるので、そのような解釈もできそうである。また、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌巻之拾』には、「扱また此フスコベツの手前より東部子モロ越えの道と云もの有。是は松前家代かわりの節家老耆人御順見の時ならでは決而通ることなし。然し夷人は毎々通るなり。」と記述されている(吉田 1971)。フスコベツは「元此処に川口有りしと聞り。今は水溜りとなりたり。越而運上屋前に到る」となっていることから(吉田 1971)、旧ウエンベツを指しているのでニナルエサンから斜里山道に入った位置となる。

記録では網走から来てクシタを経由して、斜里に宿泊してから斜里山道に向かっている。このことは『廻浦日記』にも書かれている。「扱一昨日の通り浜道拾八町戻りて山手の方にニナルエサン此所より子モロ越入口坂道上る。ニナルエサンは薪取に通ふ路と言訳也。平野少し行樹少し有。谷地多くして道わるし。暫く行、フシコベツ橋有。此橋腐朽して折れ、馬式匹川に落る。大に土人共騒動致しける。巾十二三間。遅流にして深し。フシコベツは古川と訳する。また此川をウエンベツとも言り。ウエンは悪き、ベツは川也」。

『西蝦夷日誌』でも斜里に宿泊した後に、斜里山道へ向かうためにニナルエサンに戻っている。「舍利を立て十八丁廿間浜ままニナルイサン山道入口まで来り、是より坂(ヲタス)を上る。惣て一面の原なり。五六丁過樹木立原に入しばしウエンベツ川中四五間、橋有悪川と云儀。遅流にして深し。」となっている。さらに、「シヤリ川ヲ渡り此川幅四拾間位ニテ舟渡シナリ。一昨日通行ノ時モ是ヲ渡リタリ。之を過ギテ十八丁海岸行キテニナリエサント云所アリ。此ヨリ山道子モロ越ノ入口トナリ」となっている。

安政4(1857)年に巡行した玉虫左太夫の『入北記』(稲葉 1992)に、斜里領(「シヤリモンベツ境ヨリ子モロシレトコ境迄」)の家数、在住数が書かれている(表3)。

『蝦夷道中記』に、「シヤリは北海をうけてサル川を帯ひ、東西に夷村連りて鮭鱒の猟業をなせり運上屋ありて(略)」と、斜里川を挟んで集落

が東西に連なっていることが書かれている。このことからシヤリ東通は斜里川右岸のバナコタンで、シヤリ西通は『廻浦日誌』に「此所を西側と申」とあることから斜里川左岸のクシタコタンに該当するのであろう。『廻浦日記』に記された人家20軒、住人82人とほぼ同じ数である。

『松前詰合日記』の文化4年の記述に、「東地クナスリ申場所西道江抜け候には山合川筋通七日相懸申候仕泊り宿は蝦夷小屋ニ」とある。クナシリから七日かかって西通りに抜けて、山間の川筋を通り蝦夷小屋に泊まって来たという記述である。更科源蔵(1955)は、現在の越川越えを東通りとし、斜里山道方向を西通りとしている。このことから、斜里川の左岸(西岸)となるクシタが西通りとなろう。また『廻浦日記』には「少々浜手の方によりて字バナと云処にむかしは土人の小屋百軒も有りし由なるが、当時三十軒、人別百六拾人」と既述されている。

以上の古文書から、坂井氏の話されていたクシンコタンはクシタで、バナコタンはハナ、バナ、バナとすることができよう。クシンコタンはクシュンコタン遺跡で、バナコタンはタンネウシ貝塚の西端がガツタンコ貝塚付近となろうか。またコタンケシ(村の下のはずれ)という地名が残されているが、かつてのパナコタンの西端を指していると考えられる。リクンコタンについての具体的な手がかりを得ることができなかったが、少なくとも江戸末にはアイヌ集落としては所在し

表3. 玉虫左太夫『入北記』(稲葉 1992)にみられる斜里領の家数、在住数。

	家数 (軒)	人別 (人)	男 (人)	女 (人)
シヤリ東通	31	125	58	67
シヤリ西通	21	81	42	39
ウナベツ村	3	10	6	4
シユマトカリ村	2	10	4	6
ヲン子ベツ村	7	32	16	16
シレトコ村	3	11	5	6
ヤンベツ村	7	25	11	4
フレトイ村	4	16	8	8
アヲシマナイ村	4	17	6	11
合計	82	327	156	71

ていなかったと考えられる。

ヒッチコック (1890) に、斜里のアイヌ家屋が掲載されている (図 11)。ヒッチコックは明治 21 (1888) 年に斜里を訪れている。写真には、家、蔵、クマ檻が写されている。図 11-B は、「この家の場合、前面の屋根の頂点のちょうど下位のところに、小さい開口部があり、それを通して煙が逃げ出す、そして寒い気候の時には、これが煙の唯一のはけ口となる。屋根の中程にほどにある開閉自由な板のまどが、屋根を通しての換気口になっているが、これは冬期間には閉ざされる。この種の家は、冬の極めて寒い北部では共通している。」と説明されている。また、家の周りに風や砂塵を防ぐための囲いがしてある。家囲いには、イナウと思われるものが立てかけられている。家には広い玄関が設置され、居間との間には屋根と同じ高さの四角く囲まれた構築物もみられる。屋根材や囲いには、ヨシかあるいはカヤが用いられている。さらに屋根や蔵は、丸太材で補強されている。蔵の屋根は丸みをおびている。

蔵の屋根について、明治 23 (1890) 年に斜里を訪れたランドーアは次のように述べている。「斜里アイヌは、その倉庫を作る際に、クチャロ湖のアイヌの仲間に似た、円筒形の屋根をつけるのである。」(ランドーア 1893)。しかし残念なことに、斜里のどこの集落を指すのかは特定できないが、前述したようにクシンコタンが明治 17 年の火事で消滅したと言われることから、パナコタンカリクンコタン (パナコタン) のどちらかを指すものと考えられる。さらに「家の周りに風や砂塵を防ぐための囲いがしてある」との記述を基に考えるならば、海岸沿いに所在していたパナコタンの可能性が高い。

ランドーアは、標津から斜里山道を越えて斜里に入っている。「斜里には、50 戸のアイヌ小屋と 10 戸の日本家屋があつて、アイヌ人口は約 100 人ほどであった。(略) 夕焼は川の速い流れの中に繁栄して、実に雄大であった。数軒のアイヌ小屋が、対岸の砂でかくれている場所にあつて、輝く赤と黄色の空に向かって、立っていた。そして、ここかしこで、大きい魚が水からはね上り、一瞬水に写った影をうち消すために、同心円の輪を次々とあとに残している」。ここにでてくる川とは、斜里川を指しているのであろう。夕焼けを

みているのが川の東側 (右岸) の位置からなので、対岸に建っている数軒のアイヌ小屋とは斜里川左岸のクシンコタンを指していることになる。しかし、クシンコタンは既に述べたように、明治 17 年頃に火災で消滅しているのが該当しないことになる。

さらにランドーアが宿泊したのがパナコタンであれば、この位置からクシンコタンは見えない。クシンコタンは砂丘の上に所在していたので、「数軒のアイヌ小屋が、対岸の砂でかくれている場所にあつて、輝く赤と黄色の空に向かって、立っていた。」との記述からして、クシンコタンではありえないことにもなる。

これらのことから二つの推測ができる。一つは、かつて斜里川河口がパナコタンの所在した東側に延びていたことから、この両岸に集落が在ったと仮定した場合である。そうであれば海側から対岸を見た景観となる。もう一つは、パナコタンからリクンコタンを見たという推測であるが、川を挟んでとなると疑問しせざるをえない。いずれも、クシンコタンが明治 17 年頃に火災で消滅した事実がある以上、ランドーアの見た場所は特定できそうもない。

明治 24 (1891) 年に、ジョン・ミルンも網走から斜里を訪れ一泊している。硫黄山の記載は詳細に述べられているが、市街地のことについては「斜里は約 100 人の村で、主としてアイヌ人である」(水野 2002) と書かれているだけである。

斜里川河口の変遷

斜里川河口の位置は、流路が大幅に何度か変遷している。古くは、河口部が市街地の東側に大きく寄って海に流れ込んでいる。それに伴って、斜里に所在した右岸の集落の位置が変わっている可能性も考えられる。しかし流路の変化は東側となる右岸だけで、左岸に所在していたクシンコタン遺跡の附近の地形は変わっていない。クシンコタン遺跡の南側を流れるウエンベツ川も、その流路を変えている。この川の上流部には、トウツル沼から流出するウツナイ川が流れ込んでいる。さらにこの川が流入する斜里川も、既に述べたように流路が変遷している。『西蝦夷日誌』をみると、パナ付近まで河口が東側に大きく延びている。『手控』、『廻浦日記』でも同じように東に寄り、パナ

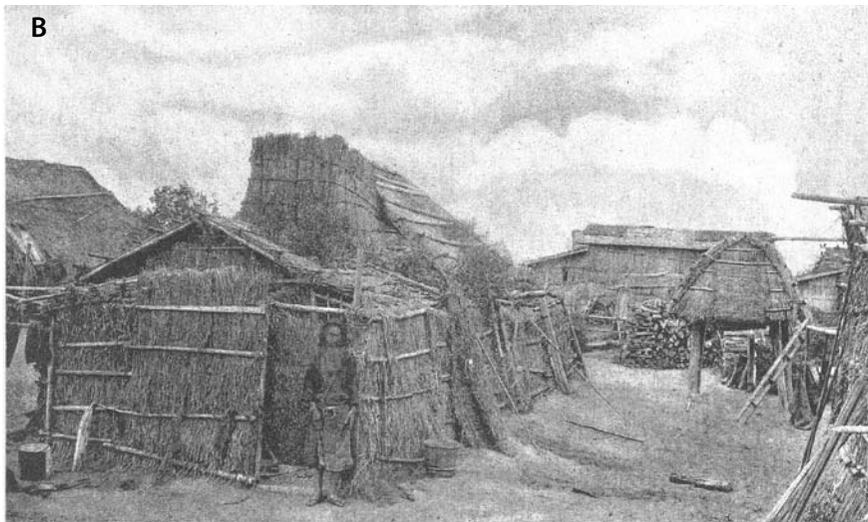
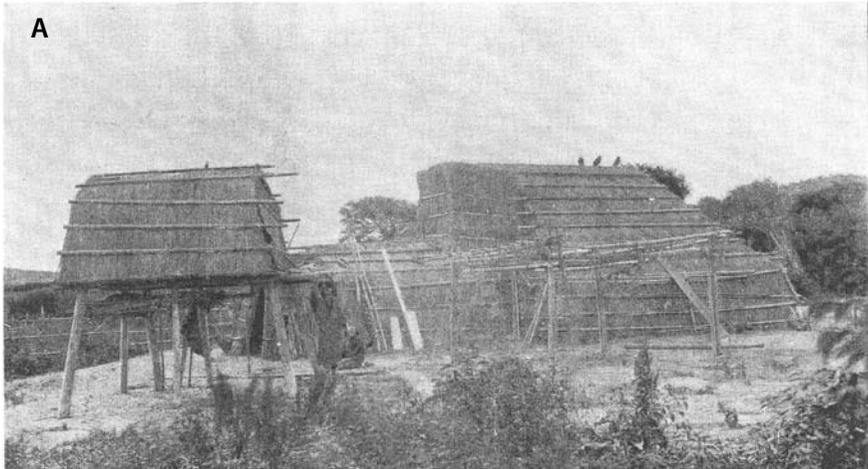


図 11. 斜里・アイヌ家屋。ヒッチコック (1890) より。

付近で大きく西側に湾曲している。

河口付近の管見できたもっとも古い明治期の図は、「漁場実測図」である(図12)。これを見ると現在の斜里川は、河口付近で右岸となる東側に大きく蛇行し海に注いでいる。海側に中洲が見られることから、さらに流路が変わっていたことが推測される。この図は、「漁業免許状」(北海道廳網走支廳発行, 明治21年)の附図と思われる(金ら1981)。

図12. 漁場実測図(明治21年)。金ら(1981)より。

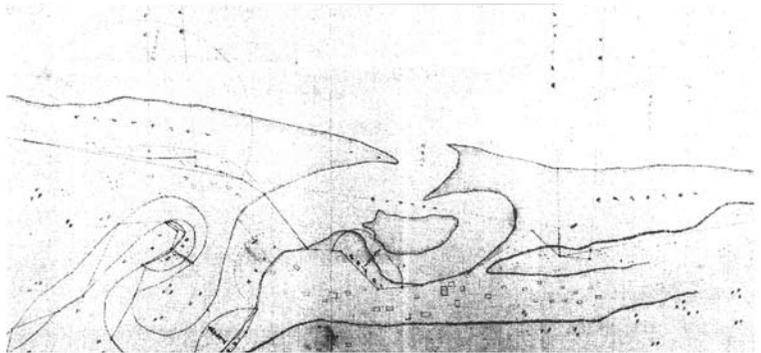


図13. 斜里市街図(明治26年頃)。斜里町史編纂委員会(1955)より。

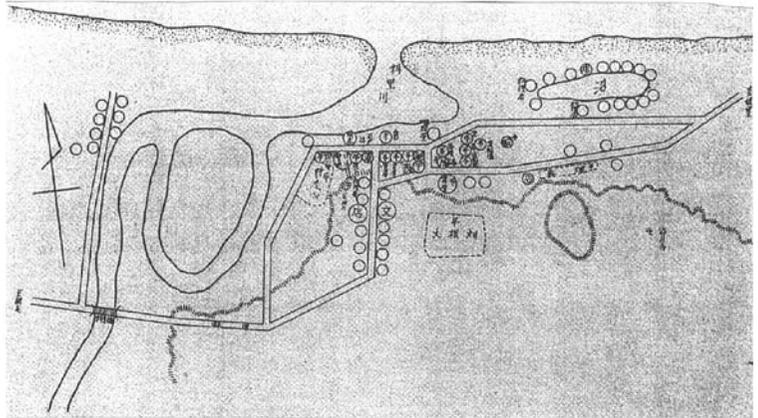


図14. 斜里市街図(明治29年)。金ら(1981)より。

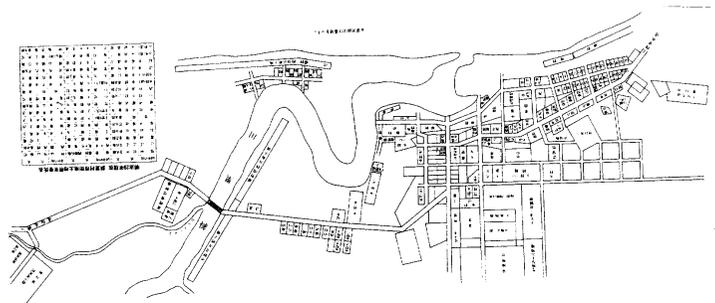


図13は、明治26年頃の小山田市太郎による斜里市街図である。この図には海側に中洲はなく、斜里橋の下流が大きな中洲となっている。また河口の東側に沼があることから、河口付近での蛇行跡が三日月湖として残ったものと考えられる。明治29年斜里市街図には、斜里橋下流の中洲はみられない(図14)。図15(明治30年?の小林和夫蔵20万分ノ1地形図)は、図示していないが明治29年の陸地測量部図と斜里川河口付近での

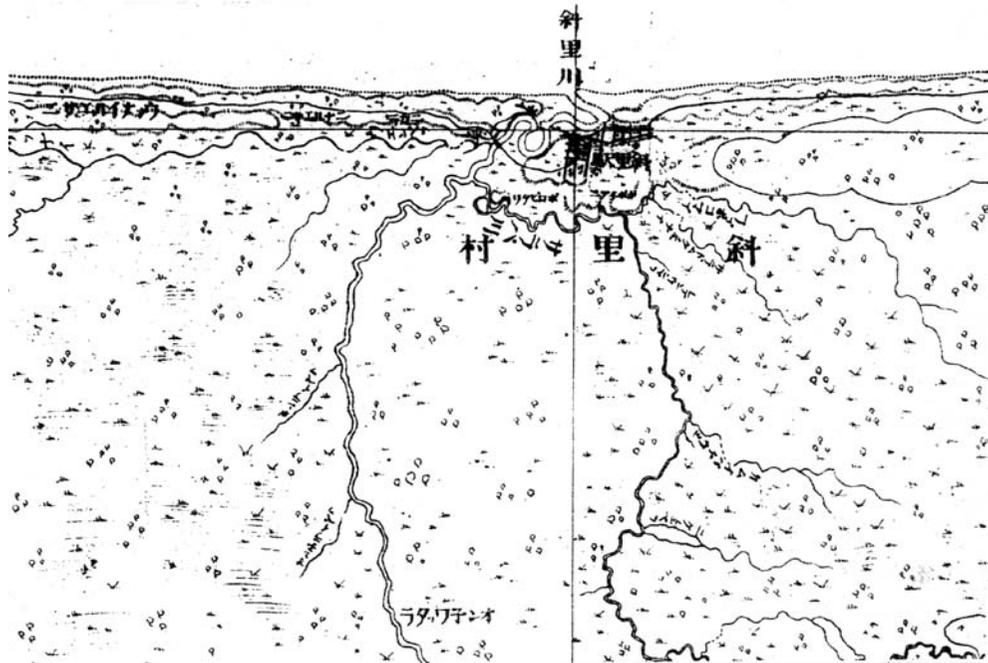


図 15. 20 万分ノ 1 地形図 (明治 30 年?). 小林和夫蔵.

流路は同じである。この図では、斜里橋の下流で蛇行しながら東側に延び、海への流出部は大きく西側に寄っている。「自高島至斜里沿岸二十三図」(図 6) や、「シヤリ運上屋元眺望」(図 8) に似た状況を呈している。図示していないが大正 7 年の市街図は、流出部を除くと、むしろ明治 26 年図(図 13)に近い状況を示している。

前述した『松前詰合日誌』をみると、津軽藩陣屋は海岸に設営されている。「陣屋の敷地は、西表口は四百間、東裏行き百五十間、南側三十間、それから先は湿地で山に続いている。(略)南東の日の射す方は裏に当り、陣屋のうしろ百間ぐらいから湿地で、それから大笹が続き、樹木が繁茂して日射を妨げ、日ざしが薄く、柏の木立となっている」(田中・高倉 1973)となっている。現代語訳の中に「斜里陣屋・会所・墓所の想像図」が掲載されているが、陣屋の南東側は日誌の記述のように湿地となっている。この湿地の部分が、かつての斜里川の流路の名残とできるであろう。このことから河口は東側のガッタンコ貝塚付近にあったのが、その後河口は西側に移動していたものと理解できる。いずれにしても斜里川右岸に所在していたアイヌ集落の位置は、斜里川の氾濫等による河口の変遷に伴って移動していることが

推測される。

地名解釈によるクシュンコタン

クシュンコタン遺跡付近のアイヌ地名の解釈が、斜里町史の中に記載されている(知里 1955)。クシタについては、「正式にはクシタコタン(kus-ta-kotan 川向う・の・村)。またクスンコタン(kus-un-kotan 川向う・の・村)。今の斜里市街に三つの部落があった。一つはパナコタン(pana-kotan 川下・村)で今の役場の下の禅寺の辺、一つはペナコタン(pena-kotan 川上・村)で今の漁業組合のある辺、もう一つはこのクスンコタンで斜里川を西に渡った所にあった」と述べている。これらのコタンの位置について永田(1891)は、「クシュタ 川向ヒ 斜里川ノ西岸」、「パナ 川下 斜里川ノ下流ニシテ斜里村ノ辺ヲ云フ」としている。クシタについて『手控』には、「クシタ 川向とい云こと也」、『西蝦夷日誌』では「イクシタの語り語。則向ふ也」と書かれている。

パナコタンの位置であるが、『西蝦夷日誌』では「舍利運上屋(略)此岬をハナと云、名義下と云が如し。夷人多く昔し百餘軒、今減じたり三十軒百三十人。(略)地形西北向、アハシリのノツカと対し、其間北向一大湾をなしたり。後ろは小

木山低し。前に川有。冬分至てさむし。土地砂にてわろし。五六丁上に上りて肥沃す。シヤリとは湿沢蘆荻の儀也。」となっている。このことから、この頃は『手控』の挿絵や「シヤリ運上屋元眺望」に描かれた斜里川右岸のさらに東に延びた岬を指し、斜里川の川下（河口）ということになる。ただ疑問なのは、『手控』にバナの記載が2ヶ所みられることである。バナコタンの位置が、住人の減少やあるいは斜里川の流路の移動に伴って変わっていたのであろうか。

また『廻浦日記』では、運上屋元から「(略)少々浜手の方によりて字バナと云処にむかしは土人の小屋百軒も有りし由なるが、当時三十軒、人別百六拾人、(略)扱此所の惣乙名是より東通りシレットコ(子モロ場所境)までの間を支配す。其間」となっている。

『西部志礼登古志坤』の記載は、「バナの下え取りしや、夷童とも裸に成りて海に入ホッキ・鯨等をとる様みえける哉(われらを見て)一同によるこび(寄り来る也)よる也。ウナヘルより二里半といへるを纒時の間にシヤリ川口えぞ(舟を)入れけるに、岡のほうにては我ならんと推察せしや。運上屋えはしらさせ出迎たりける。」となっている(秋葉1985b)。『知床日誌』には「タンネウシ沙地。此所長き沙地なれば号く。過てバナ人家拾五間の岬を廻りて川に入るに中三拾余間、しばしにて舍利運上屋へぞ着し、一同鎮社に至り」と書かれている(吉田1964)ので、長い砂浜を過ぎて、バナの集落の岬を舟でまわり斜里川に入っていくとなっている。これらの記録から安政年間の斜里川の河口は、会所より東に隔てた東側のバナの前に位置していたことになる。

金・金盛(1986)は、「バナコタン 川下の・村 今の図書館から博物館の下にかけてあった村。クシタコタン、ペナコタンとともに斜里川河口域の村を構成していた」とし、ペナコタンの位置については、「ペナコタン 川上の・村 もとの斜里第一漁業組合事務所あたりにあった村で、リクンコタン(rik-un-kotan)高い所に・ある・村)ともいった。」としているが、『斜里町史』からの引用であろう。河野広道氏は、「斜里川口には現在の停車場と郵便局の付近にかけてペナコタンがあり」(河野1955)とし、河村氏は「リクンコタン(トキリヤパン屋)」としているので、JR知床

斜里駅から北側付近に所在していたことになる。

江戸末から散見されるバナは、知里氏によれば「ばな・川下の方」で「ペナ・川上の方」に対する言葉となっている(知里1956)。そうであれば、ペナという地名があったと考えるのが妥当であろうが、管見した古文書には記載がみられないことから明治時代以降に所在したコタンと推測するしか考えようがない。

発掘区の南西を流れ斜里川に流出しているウエンベツ川は、トーツル沼を水源としている。この川について知里氏は、「ウエン・ペツ(wen-pet) 悪い・川の義。フシコベツ(husko-pet) 古い・川とも云う」解釈している(知里1955)。トーツル沼は古くはオンネトと呼ばれている。金・金盛(1986)は、昭和初期までカワシンジュガイが川底を埋め尽くし、サケ、マス、イトウなどの魚が豊富に生息していたとしている。川の近くに住んでいた畠山氏も、昭和20年(1945)頃にこの川で魚釣りをしたと話している(畠山一美私信)。永田方正も「ウエンベツ 悪川」と解釈している(永田1891)。『廻浦日記』では、「フシコベツは古川と訳す。また此川をウエンベツとも言い。ウエンは悪きベツは川也」、『手控』には「フシコベツ はし。ウエンベツ」と書かれている。この川は安政年間には既にフシコベツと呼ばれ、悪い川と解釈されている。下流は湿地帯を流れているために、鉄分を含み赤く濁っていることから悪い川なのであろうか。安政3(1856)年、石川和助の『観国録』(北海道大学北方資料室蔵)にも既に、「『ウエンベツ』ト云フ、水源ハ近傍ノ谷地ヨリ出ルト云フ、(略)シヤリ川ハ清冽ナリ、『ウエンベツ』ハ甚ダ汚濁ナリ、土質ハ赤色黒色相半ヌ」と記述されている。いずれにしても現在この川は、遺跡付近では流路を変えて本当にドブ川とも言えるフシコベツ・古川となっていて昔の面影はみられない。

おわりに

発掘報告書の作成後に得た知見も含めて、クシュンコタン遺跡に関連することを再考してみた。基本的には報告書の中で記述したことと変わってはいない。しかし既述したように、エゾシカに刺さった銚頭や、銅製の針、かつての斜里のアイヌコタンなど課題は多く残されたままであ

る。

最後に『更科ノート』(昭和25年)に坂井惣太郎氏のヌサとコタンについての記述があるので、触れておきたい。「ヌサは共同で(オンネベツシャリ共)一つ酋長の家から何百間も離れたところで大きくやる場合(一年中一月過ぎ個正月に今年も健康であるやうに漁のあるやうに青草のよくのびるやうに)、熊祭はここでした。他部落の人もよぶ場合、山の太木の下にカムイヌサ、各戸にポンヌサ、レブンカムイにはコタンコロカムイカムイカップも飼って送った。コタンはシャリ、ヤンベツオンネベツ(ウナベツに移った)、シレトコの岬にあった」。

引用文献

- 秋葉實(解説)・松浦武四郎(著). 1985a. 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌上. 676 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 秋葉實(解説)・松浦武四郎(著). 1985b. 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌中. 702 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 秋葉實(解説)・松浦武四郎(著). 1988. 武四郎蝦夷地紀行. 681 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 秋葉實(解説)・加賀伝蔵(筆). 1989. 加賀家文書. 716 pp. 別海町教育委員会, 別海.
- 秋葉實(解説)・細野五左衛門(著). 1992. 西蝦夷地地名附. 98 pp. 私家版.
- 秋葉實(翻刻・編)・松浦武四郎(著). 1996. 松浦武四郎選集1. 503 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 秋葉實(翻刻・編)・松浦武四郎(著). 2001. 松浦武四郎選集3. 545 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 稲葉一郎(解説)・玉虫左太夫(著). 1992. 蝦夷地・樺太巡検日誌入北記. 330 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 犬飼哲夫. 1970. アイヌのしか猟. アイヌ文化保存対策協議会(編), 児玉作左衛門・犬飼哲夫・高倉新一郎(監), アイヌ民族誌. 334-340 pp. 第一法規出版株式会社, 東京.
- 大野良子(校註)・成石修(著). 1978. 東徼私筆. 281 pp. 政界往来社, 東京.
- 金盛典夫. 1970. 所謂キテの新資料2例とその機能的差異. 釧路市立博物館々報202: 6-8
- 河村淳史. 1966. 斜里町クシンコタン貝塚発見の廻転式燕形銚頭. 北海道考古学2: 66-67.
- 河村淳史. 1972. 斜里町の失われた遺跡. 斜里町郷土研究1: 15-19.
- 河野広道. 1955. 先史時代史. 斜里町史編纂委員会(編), 斜里町史. pp. 1-75. 斜里町, 斜里.
- 金喜多一・金盛典夫. 1986. 地名探訪しゅり(郷土学習シリーズ8). 斜里町立知床博物館協力会, 斜里.
- 金喜多一・小泉昇・日置順生・金盛典夫. 1981. 知床博物館第3回特別展 斜里一下町の歴史散歩— 40 pp. 斜里町立知床博物館協力会, 斜里.
- 佐々木利和(編). 1988. アイヌ語地名資料集成. 543 pp + 29 pls. 草風館, 東京.
- 佐藤一夫. 1987. 弁天貝塚1. 50 pp. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター, 苫小牧.
- 更科源蔵. 1955. 明治前史. 斜里町史編纂委員会(編), 斜里町史. pp. 76-230. 斜里町, 斜里.
- 斜里町教育委員会(編). 2006. 斜里町文化財調査報告29 クシンコタン遺跡発掘調査報告書. 60 pp + 30 pls. 斜里町教育委員会, 斜里.
- 斜里町史編纂委員会. 1955. 斜里町史. 944 pp. 斜里町役場, 斜里.
- 高倉新一郎(解説)・松浦武四郎(著). 1978. 竹四郎廻浦日記下. 608 pp. 北海道出版企画センター, 札幌.
- 田中最勝(現代語訳)・高倉新一郎(解説)・斎藤勝利(著). 1973. 松前語合日誌全. 70 pp. 斜里町郷土研究会, 斜里.
- 谷澤尚一・佐々木和利. 1979. 今井八九郎の事蹟— 東西蝦夷地大河之図を中心に—. 北海道の文化41: 44-58.
- 知里真志保. 1955. 斜里郡内アイヌ語地名解. 斜里町史編纂委員会(編), 斜里町史. pp. 851-872. 斜里町, 斜里.
- 知里真志保. 1956. 地名アイヌ語小辞典にれ双書2. 169 pp. 楡書房, 札幌.
- 豊原熙司. 2001. 塘路湖におけるエゾシカ猟— 北海道東部・標茶町塘路—. 南北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会(編), 渡島半島の考古学 南北海道考古学情

- 報交換会 20 周年記念論集. pp. 192-204.
南北海道考古学情報交換会 20 周年記念論集
作成実行委員会.
- 永田方正. 1891. 北海道蝦夷語地名解. 498
pp. 北海道廳, 札幌.
- ヒッチコック R. 1890 (北構保男訳 1985). アイヌ人とその文化—明治中期のアイヌ村から—(世界の民族誌 1). 251 pp. 六興出版,
東京.
- 松浦武四郎研究会 (編). 1988. 校注簡約松浦武
四郎自伝. 436 pp. 北海道出版企画センター,
札幌.
- 松田功. 1992. 知床博物館第 13 回特別展 近世
の斜里. 36 pp. 知床博物館協力会, 斜里.
- 水野勉. 2002. ジョン・ミルンの千島列島およ
び北海道旅行. 高澤光雄 (編), 山書研究 45
北の山の夜明け. pp. 17-21. 日本山書の会,
東京.
- 吉田武三 (編著). 1964. 拾遺松浦武四郎. 535
pp. 松浦武四郎伝刊行会, 東京.
- 吉田武三 (校註)・松浦武四郎 (著). 1971. 三航
蝦夷日誌 下. 520 pp. 吉川弘文館, 東京.
- ランドー A. H. S. 1893 (北構保男訳
1978). 明治二十三年 A・H・サベージ・ラ
ンドーアひとり蝦夷地をゆく. 118 pp. 私家
版.